

◆春の訪れとともに、街のあちらこちらでは木々の芽吹きや花の美しさなど、新緑の息吹を感じる頃となっている。けれども、コロナ禍がいつになったら収まるかと思いつながら、冬ごもりとコロナ巣ごもりから出られない。年を重ねるとなおさらのこと、抵抗力が弱くなっているからだ。朝、目が覚めると、今日の天気は？ さて何を食べようかなどと一人ごとを言ってしまう。皆さんにお逢い出来る日が待ち遠しい。

市川茂子

◆知り合いから本屋大賞2021・ノンフィクション本大賞の『海をあげる』の著者上間陽子の受賞スピーチの映像が届いた。受賞は聴き取り調査をしている、沖繩の若年出産し、しんどい思いで生きている女の子たちへのはなむけの賞だと言う、その微笑みと穏やかな語りに衝撃を受けすぐ本を求めた。辺野古を問う県民投票を求めハリストをした元山仁士郎青年との交流。自ら求めて住んだ普天間での会話の出来ないほどの爆音。それらを自身の幼い娘とのユーモラスな会話に重ねながら、眩くように綴る。「沖繩のひとたちが何度やめてと頼んでも青い海に今日も土砂が入れられる。だから、静かな部屋でこれを読んでいるあなたに、海をあげる」

梅津純子

◆少人数の学級は、多くのクラスメートに気を配ったり、人の発する圧を感じたりすることが少なくて済む。反面、集団に紛れてやり過ぎしてもらえないことも少ない。否が応にも声を掛けられ、拗られる。それらに折り合いをつけることを徐々に覚えて、我が校の生徒たちは進級し卒業していく。対応に迷うことが多々ありながらも、若い人たちの変容していく姿を目撃できる職場はありがたいと思う。一つの物差しで判断せず、一喜一憂せずに接することができたか……就寝前の一人反省会では「あれはまずかったなあ」ばかり。生徒たちからこんなにエネルギーをもらっているのに、いつになってもどこかしい。困難な現代、十八歳に願うのは、世の中を多面的に見て自立していつてほしいということだ。

大橋千佳子

◆今年は雪が半端なく多いので、道路事情が極端に悪くなっている。そのこともあって、ある地区からスクールバスによる登下校の要望があった。私は登下校は基本徒歩と考えているが、声掛け事案が発生したり、夏は夏で熱中症になりかけたとか、安全を考えてバス通を望む保護者が増えていく。自分の安全は自分で守る、その術を身に付けることも大事だと思うのだが……。バス通の子等雪渡り知らぬまま」

神村ふじを

◆電車で市外に出るようなことはなくなって、もっぱら近所を歩くのみ。それは、変わらないなが

ら、また、市内でもあるところ、ここにきて、駐車場のある運動公園や、各地区の公民館（市民活動センター、という）などまで、車をつかう。そこを起点に歩く。みちを地図におとしこんで、コースになるようにした。少しずつひろがり、今では、市内そとうの部分で踏破されたことになった。集落ごとに成りたちの違いはあるが、神社は必ずといっていいほどにあり、これにお参りをする。また、地区を貫く川を遡上し、橋めぐりにしたり（土手みちがある）、と、歩いたことで、しることが多い。これは楽しみだ。じぶんのすむ地区（町内）も相対化されることになった。

小野澤繁雄

◆二年にもおよぶコロナ禍の自粛の日々に待たれるは春の訪れであった。確実に季節を徴（しる）して庭には感謝する。身近に在り当然と思っていたが、コロナ禍のお陰で自分自身をも見つめ直す機会でもあった。反省する点が多いが、まずは、周りに迷惑をかけぬよう心がけたい。河村郁子

◆春の兆しが見えてきたというのに、世界は衝撃に包まれている。独裁者プーチンのロシアがウクライナに侵攻して激しい攻撃が続く。スイスにも大勢の人たちが続々と避難してきている。たいへん痛ましいことだ。新聞は毎日大きく紙面を割いて報道。一歩間違えばヨーロッパ中を巻き込みかねない身近な戦争に、みんな心穏やかならぬ毎日だ。ギンジツク恭子

◆昨秋、『アレクシエーヴィチとの対話』（岩波書店、二〇二一年）を読んだ。アレクシエーヴィチは二〇一五年ノーベル文学賞を受賞したベラルーシの作家。この本の中で在日朝鮮人二世の徐^{キョウシンク}京植さんと対談している。私はアレクシエーヴィチにはすっかり嵌まってしまっているが、この徐さんの言葉のひとつひとつに深い感銘を覚えた。今までどうしてこんなに凄い作家に出会わなかったのだろう。いや、知ってはいた。四十年前に買った『徐兄弟 獄中からの手紙』が本棚にある。しかし重すぎて読めなかった。十年くらい前に初めのあたりで挫折した『ディアスポラ紀行』（岩波新書、二〇〇五年）をきちんと読んでみた。徐さんの思索の跡をたどることができ、ますます惚れてしまった。文章も素晴らしくうまい。私と同世代だと思いと親近感が湧いてくる。今回、印象強かったところを俳句にしてみたくなった。読書も吟行のひとつかと。新野祐子

◆散歩や買い物でよく通る目黒川の両岸は桜並木である。今年も咲き始めから終わりまでしっかりと眺めたが、桜というのは咲くときは、どうやら下の枝から咲いてゆくようである。松井淑子

◆春は別れの季節とはよく言ったもので、私は、三月を乗り切るのが毎年ごとにたいへんになってきている。父の命日、夫・テルの命日、親友だったべぼさんの命日と、次々に故人を思い出される日が波のように押し寄せる中、自分の誕生日までやってくる。誕生日には家族と共にケーキなどを

囲み、ささやかな幸せをかみしめながらも、それでいてどこか複雑な気持ちがあぐえない。そして、とうとう、自分の誕生日に、会社のスタッフが天国に旅立った。息子・ハルは「ママはこれから毎年、誕生日にはスタッフの千葉さんを思い出すね」と言った。その通りだ。三月は心から愛した人たちに見守られる一か月、一年の中で貴重な月なのだ、そう思い、出会えた故人に感謝した。

山内裕子

